

熟瓜

瓜種類

いふにあらず、此等皆甜瓜の類、漢人のいひし果瓜也。又白瓜はシロウリ、冬瓜はカモウリ、胡瓜はツバウリ、俗にキウリといふと註せし、白瓜は陳藏器がいふ所の越瓜にて、白冬瓜子を白瓜子といふものにはあらず、冬瓜をカモウリといふは、カモとは猪也、皮の上白を生じて猪の如くなるを云ひしなり、胡瓜をツバウリといひしは、其稜あるを云ひて、又キウリとも云ひしは、其老て色黄なるに因れる也、漢にも亦一名を黄瓜とも云ひけり、此等は漢人の云ひし菜瓜也、また兼名苑を引て、寒瓜はカヅウリ、至冬熟也と註したり、永嘉記の襄瓜、李東壁本草に寒瓜と云ひし物ならむには、これもまた果瓜也、今に於ては我國に是等の種ありとも聞えず、されど永嘉記に據るに、其寒瓜といふも、八月熟すと見えれば、即今の晚瓜の如きをや云ひぬらん、亦別に此種もやありつらむ、カヅウリといふは名をあはせて不詳、爾雅集註を引て、猒酌はタチフウリ、小瓜名也と註せしは、毛詩疏に據るに、瓜實近本而小なるをいふなりとあり、さらばいづれの瓜にもあれ、其本に近きが小しきなるをば、タチフウリといふべし、別に其種ありとは見えず、タチフといふ義もまた不詳、胡瓜をキウリといふ、或は其臭あるをいふ歟、猶漢に胡瓜もまた不詳、胡瓜といふが如き、此俗臭なげきといふ、五辛菜を併考ふべし。

〔倭訓栞前編四〕うり 瓜をよめり、口渴をうるほすより名とせる成べし、ふりと書は非なり、其名を専らにする者は甜瓜也、からうりとも、あまうりともいへり。

〔南留別志五〕一瓜をふりとかく事は、壺盧をとり違へたるにや、壺盧の唐音うるなり、うとふとの間をいふより、ふとかくなるべし、るもりゆといふやうなれば、りといふなるべし。

〔和漢三才圖會九十〕瓜類不同、其用有二、供果者甜瓜、西瓜、供菜者、胡瓜、越瓜、凡實在木曰果、在地曰蔬、大曰瓜、小曰瓠、和名多知 其子曰瓠、音廉 其肉曰瓢、白瓢、俗云奈加古 其跗曰環、謂脫花處也、俗云豆之、猶人頭之旋毛、其蒂曰囊、一名丁 謂繫蔓處也。

〔本草和名十八〕熟瓜、陶景注曰、熟瓜有二、一名水芝、一名蜜筍、一名搗樓、一名厭須、熟瓜總名也、已上 和名